

学校だより

11月号（巻頭言）



嶺 鶴

令和7年10月31日
大田区南久が原 2-17-1
電話 (3750)2260
FAX (3750)2280

コミュニケーション不全は疲労を招く

大田区立東調布第三小学校

校長 並木 昭

「電話代がもったいないから、そっちからかけ直せ。」

受話器を握った途端、耳が鈍く痛みます。ひと呼吸おいてから思いました。「なるほど。合理的なことを言っている。」

こちらからすぐに折り返します、と伝えては断られてきた経験から、この言葉には驚きを覚えました。数年に一度、このようなことがありました。私の行政時代のことです。

本年9月と10月は、学校公開をはじめ、2回の研究授業など、授業の活性化に関わる実践が詰まった期間でした。これらの取組には、地域の方々と保護者の皆様の御協力が不可欠です。その成果として、教育課程の質の向上への一步を刻むことができたと感じております。研究授業のうち1回は、近隣校の教員も来校され、教科「おおたの未来づくり」の授業を参観し、協議会にも参加していただき、数多くの御助言をいただきました。また、区教育委員会指導課の先生方を講師としてお招きし、指導・講評とともに温かな激励を頂戴いたしました。御協力いただきましたすべての皆様に、改めまして深く感謝を申し上げます。

さて、さきほど触れました私の経験談に戻ります。

生成AIに質問をしたところ、次のような回答を得ました。以下はその抜粋です。

【質問】公の自分と匿名の自分を一致させたいという、誠実さや一貫性を求める気持ちは、どのような契機で醸成されますか？

【回答の抜粋】「二人の自分」を演じることへの精神的疲労：公の自分（ペルソナ）と匿名の自分を使い分けることは、常に頭の切り替えを必要とし、精神的なエネルギーを消耗します。ある時ふと、「なぜこんなに疲れることをしているのだろう？」と我に返り、もっとシンプルに、ありのままの自分でいたいと願うようになります。

身元を明らかにして議論する覚悟には、たしかに苦痛を伴います。しかし、「一人の私」としての自分を大切に人と向き合えば、匿名性がもたらす疲れはそもそも生まれない、ということでしょう。これは人権教育につながる大切な考え方なのでは、と思うところです。